Ohkagakuen University

〔史料紹介〕

一九一七（大正六）年向野兄弟の朝鮮・満州旅行

－『骨肉』・大正期家庭教育をうかがわせる手づくり雑誌（二）

The Kono Brothers' Travel in Korea and Manchuria in 1917

－"KOTSUNIKU", a Handmade Magazine as Historical Material of Family Education in the Taisho Era (2)

齊藤　太郎
SAITO Taro

要　旨

向野兄弟たちの手づくり雑誌『骨肉』一九一七（大正六）年八・九月号は「朝鮮満州旅行記念」と銘打って、この年七月、八月にかけて朝鮮、満州を旅行した向野兄弟四人の文章を載せている。彼らの父向野堅一は当時満州にあって、奉天を中心に経済人として活動していた。兄弟たちの旅行は朝鮮を経て奉天に至り、そこから大連まで、その間に満州の各地を訪れるものであった。内容としては、満州旅行に多く日時が費されている。

兄弟はいずれも十〇代、下は一二歳から上は一八歳の、将来の問題が現実味を増している年代にあったといえよう。

「旅行記念」とうたっていたものの、旅の行程に即して書かれたものは末弟の一編に過ぎず、載せられた兄弟の上三人の文章は、この旅行に触発されて書かれたものとしても、旅行の大部分を占める満州滞在に関して直截的に述べたとはいえないものもあり、満州が彼らの父の事業の場であることを考慮すると、文章に示された、この消極的な関心のありようの意味することは何か注意されよう。

以下掲載文の引用にあたっては、朝鮮、満州等の地名については原文のまま、漢字は新字体の表記。「満洲」は「満州」とした。

一

「父が遠く、満州に行きて、可愛い子供と、共に暮す事の、出来ぬも、皆子供の、立身出世を、させたい為めに、働いて居る」――父向野堅一が、福岡県に居た四人の兄弟に宛てた手紙の中で、こう書いたのは一九

NII-Electronic Library Service

Ohkagakuen University

一三（大正二）年九月のことであった。それから四年が経とうとする一九一七（大正六）年夏、兄弟に満州に行く機会がおとずれた。夏休みを利用して朝鮮を経て満州各地をめぐる約一ヵ月の旅行をすることになったのである。袴に下駄をはいた四人の最初の満州行であった。四人による手づくり雑誌『骨肉』は、旅行後に作られる八・九月号を「朝鮮満州旅行記念」として、関連する文章を収めている。その内容について紹介を試みることが、本稿の狙いになる。

二

兄弟たちの旅行が行われる一九一七年は第一次世界大戦が継続中であった。一九一四年にドイツに宣戦布告した日本は、その年に中国に出兵、青島を占領している。翌年には中国に二一ヵ条の要求を行っている。一九一〇年に日韓併合条約を実現させた日本の中国大陸進出が強力に行われることになるが、中でも満州における権益の確保は、日本にとって重要な関心事であった。もちろん、この満州への関心は明治時代から続くものであった。これに関して、一九一九（大正八）年刊行の国定教科書『尋常小学地理書』巻二は、次のように説明している。

「明治三十七八年戦役の結果、我が国は関東州を租借し、南満州鉄道を収め、近時又南満州及び東部内蒙古に諸種の事業をなすの権利をも得たれば、我が国人の此の地方に移住するもの漸く多くして、其事業も次第に盛なり。尚支那本部に於ても山東省を始め、各地にて鉱業・工業等に関係せるもの少からず。」（唐澤富太郎、一九六一、六二三ページ）

兄弟たちは、まさに「其事業も次第に盛なり」といわれる満州を直接体験することになったわけである。しかも、彼らの父、向野堅一は、その事業の発展にかかわる主要な人物の一人であった。

一八六八（明治一）年福岡県直方に生まれた向野堅一が自からの活動の場として中国大陸に関心を寄せるようになったのは、いつのことかわからない。しかし、一八九〇（明治二三）年に中国（当時清国）上海にあった日清貿易研究所に入学したことで、その関心を現実化する動きが明確になった。一八九三年に全科卒業して、実地商業研究のため中国各地を視察していたが、翌年、日清戦争が始まり、陸軍省通訳官として第一師団司令部付となり、清国軍の動向を偵察する特別任務を与えられることになった。この間、捕縛され、遁走するという危険な場面をくぐり、同じ任務に従事していた同僚が全て捕えられ刑死したなかで、彼一人が生存することを得た。日清戦争従軍のことについて、堅一は後に従軍記を残し（向野堅一、一九六七）、兄弟たちも、この著のほか、直接父から当時の話を聞くことになる。

その後、台湾総督府付（一八九五）、北京日本公使館御用達店経営（一八九六―一九〇〇）、陸軍省の命で遼西物資調査（一九〇五）等を経て、一九〇六（明治三九）年より奉天で商業に従事、茂林洋行と称し石炭販売を始め、一九〇八年には硝子製造業、正隆銀行を開設している。兄弟たちの旅行の年、一九一七年には瀋陽建物株式会社専務取締役、奉天商業会議所副会頭になっている。

というわけで、この時期に朝鮮そして満州を訪ねることは、日本の現代史の焦点にある舞台を見ることであり、兄弟たちには、それが同時に父の仕事の現場に触れることになるのであった。

「朝鮮満州旅行記念」にふさわしい記録を『骨肉』に載せたのは末弟

NII-Electronic Library Service

Ohkagakuen University

の啓助で、彼の「満州旅行日記」は、博多を出発し小倉、門司を経て下関で釜山に向け乗船する第一日目から、大連を出港した船が、一日置いて、門司に着き、福岡で無事に母の顔を見る第二八日目まで、記述なしの日も若干あるが、連日何か書きとどめている。第一日目、第二日目と記されて、何日何曜日は記されていない。ただ、第二六日目、大連で乗船の日が八月一五日と記されているので、逆算して、第一日目が七月二〇日頃に当たるらしい。

（以下兄弟の名前は、長兄から啓助まで順にS、Y、M、Kと記す。）

三

旅行日記の第一日目は、母や妹に見送られ博多駅を出発するところから始まる。遠賀川の鉄橋を渡り、八幡、小倉を過ぎ、下関に渡り、三千トン余の新羅丸に乗り、夜一一時前に出帆する。

第二日。午前九時半頃釜山に着き、一〇時四〇分釜山発。機関車は内地のものより大きく、線路も客車も大きい。

「見るもの聞くもの皆めづらしきもののみなり。

朝鮮の山々皆木少しと雖今日にては総督府より松等を植えさしめたればや、多くなれり

「家は藁ふき多く人は多く白き衣を着男は長きさせるをくはえて喫煙にふけり女は此方彼方の川、池にて洗濯をなす」

と、車窓より異郷の風物を楽しむ調子である。午後九時頃京城大南門に着いた。すぐに別の列車に乗り換えて夜行の旅を続ける。

第三日。夜明け間もなく新義州に着き、一〇時半に発、鴨緑江の長い鉄橋をゆっくり渡って安東に着いたのが一〇時四〇分。税関の調べを終え出発。「なつかしき奉天」に着いたのは午後六時三一分。「見れば満目皆平野のみ」であった。父の迎えを受けた。

三

NII-Electronic Library Service

Ohkagakuen University

第四日から二二日目までは奉天の「我家（父の家茂林洋行）」に落着き、各地を見てまわることになる。

第四日。朝、「旭湯（元治の経営する湯）」に入り、旅の疲れを休めた。蝿が多い。風が吹けば名物のごみが散る。夜はヤマトホテルを見に行き、ピアノをひき、多数の室を見た。

第五日。毎日旭湯に行くときめた。梅雨時の道で足が泥まみれとなった。

満洲旅行日記

第六日は父に連れられ本格的に奉天の市街を見てまわった。日本の満州経営の状況に触れることになる。「鉄道を初めとし病院電燈上下の水道に到るまで皆満鉄の経営なり」とKは記している。新しい設備・機械を備えた事業所の見学には、満州での経済・産業活動への兄弟たちの関心意欲を育てようとした父堅一の配慮がうかがえるだろう。兄弟たちが接することになる人びとや場所は、父の日頃活動する世界を構成するものであった。

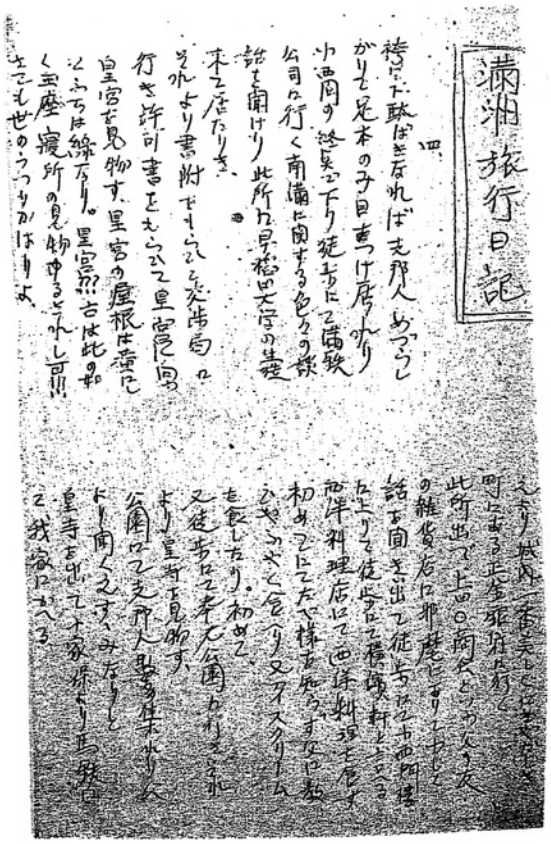
「日露戦争直後から開始される日本の満州経営は、満鉄の鉄道・鉱山・各種サービス業・付属地経営の展開を中軸とするものであったが、同時に、〔略〕金融業・化学工業・卸小売業などの中小商工業が裾野のように展開していった」（柳沢遊、一九九九、一六ページ）といわれる満州経営の重要な一面を一二歳の少年は書き留めているといえよう。

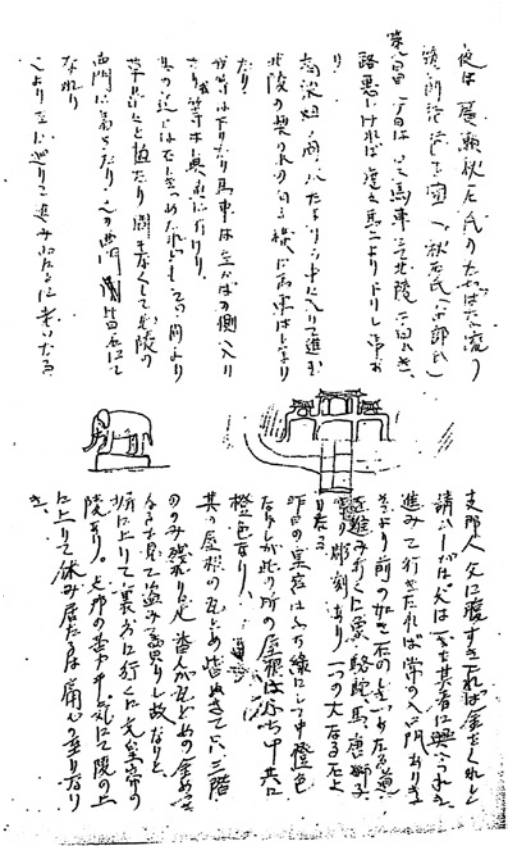
第七日。ハカマと下駄の姿が珍しがられる兄弟たちは、許可証をもらい皇宮見物に出かける。玉座・寝所まで見物が許されるようになったことについて「さても世のうつりかはりよ」と記している。それから「城内一番美しくにぎやかしき町にある正金銀行」に行き、また、雑貨店を経営する父の友人をたずね話を聞いた。さらに、西洋料理店で西洋料理を初めて食べた。食べ方は父に教えられた。アイスクリームも初めてであった。

四

NII-Electronic Library Service

Ohkagakuen University

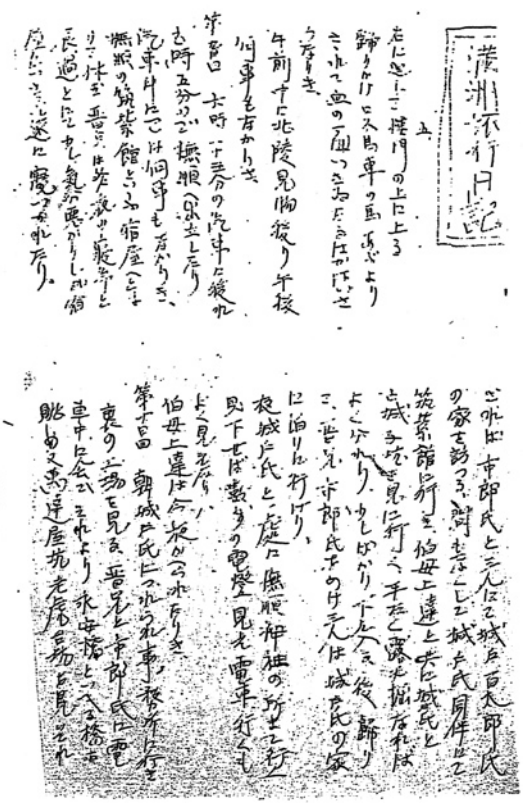


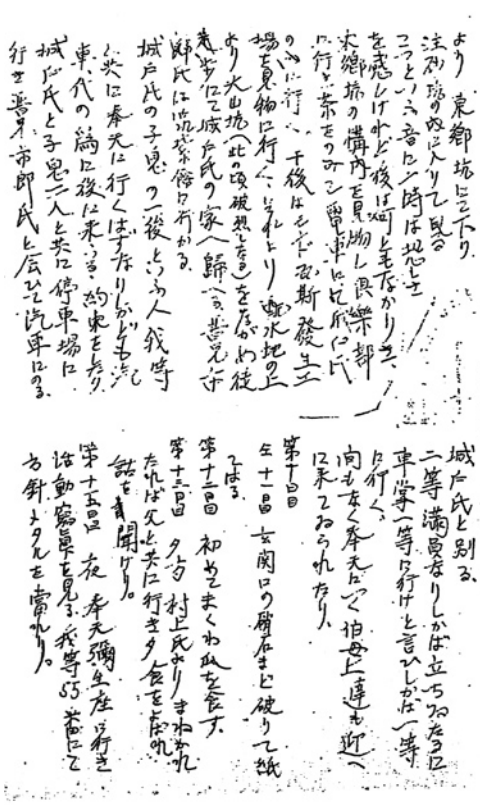


第八日。馬車で北陵を見に行った。「……文皇帝の陵あり。支那の苦力平気にて陵の上に上りて休み居たるは痛心の至りなりき、」

第九日。撫順に出かけた。古城子坑で露天掘りの現場をたずねた。知人宅に泊り。

第一〇日。知人の工場を見て、禹達屋坑、光虎台坑と、前に続き礦山を見て、坑の内にも入った。ガス発生工場も見に行った。





NII-Electronic Library Service

Ohkagakuen University

一一、一二、一三、と簡単な記事。第一五日には、奉天弥生座で活動写真を見るとある。

第一六日、「支那の軽業」を見たが余り面白くなかった。知人の招待で「支那料理を食せり　支那料理はうまし」

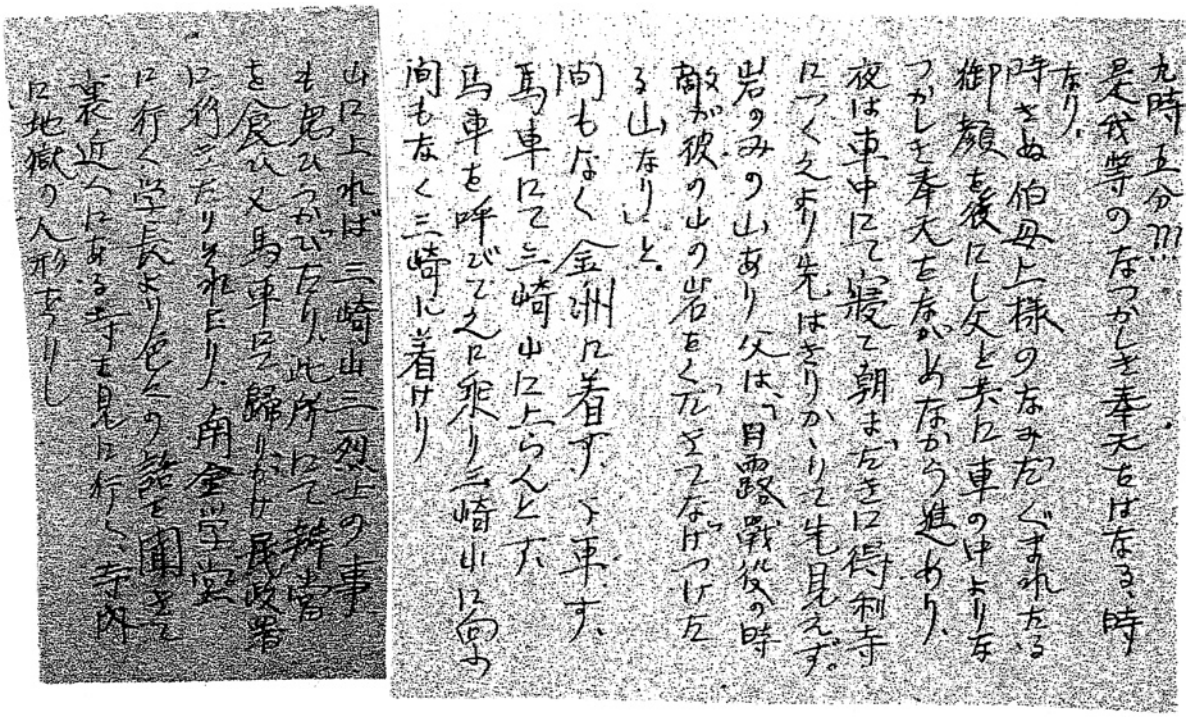
第一八日。「朝父につれられ貸家を見後に機関庫を見に行く」。父の所有する貸家を見に行ったのであろう。

第一九日。「夜黒住教き、に行く」とある。この日記では初めて（八月七日）の日付が記してある。記してはいるが、それ以上、黒住教にも、黒住教をききに行った人たちについても関心がないようである。

第二〇日は記事なく、第二一日は「明日は大連に向ふはず」とだけ。

第二二日、奉天を離れる日が来た。大連に向い帰国の途に着くのである。その間、金州、旅順と日清・日露の戦跡をたずねる。いずれの場も陸軍に属していた父にはゆかりがある。特に金州は軍事探偵として命を懸け行動した戦場ともいえた。車中で往時をしのぶ父の談話があったはずだが、その内容についてKは特に書き留めておくということはしていない。彼の記述は簡単に経過を記したのみ。帰りに寄った南金学堂についても触れただけである。

〔表　紙〕



九時五分前…
是我等のなつかしき奉天をはなる時
なり。
時きぬ伯母上様のなみだぐまれたる
御顔を後にし父と共に車の中より名
つかしき奉天を眺めながら進めり。
夜は車中にて寝て朝まだきに得利寺
につく之より先はさりかゝりて先見えず。
岩のみの山あり父は「日露戦役の時
敵が彼の山の岩をくだきなげつけた
る山なりし」と。
間もなく金州に着す。下車す。
馬車にて三崎山にとらんとす
馬車を呼びて之に乗り三崎山に向ふ
間もなく三崎に着けり

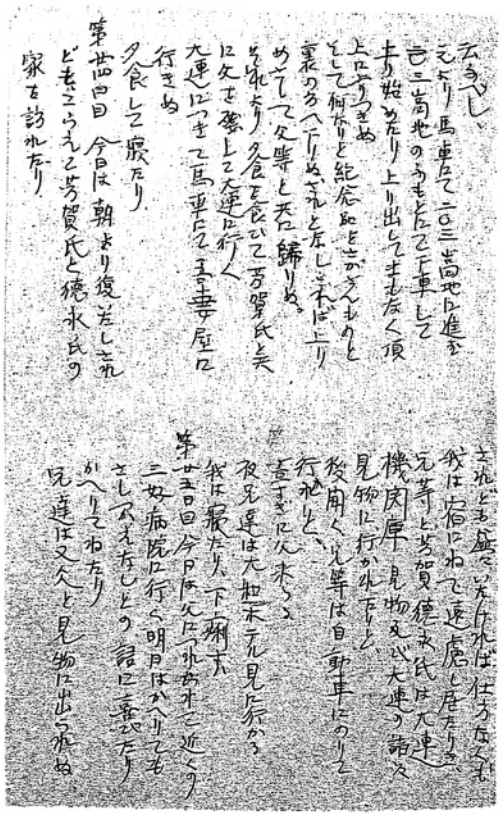
山に上れば三崎山三烈士の事
を思ひ出だしたり。此所にて弁当
を食べ又馬車に帰りかけ旅順港
に向ふたりそれより南金学堂
に行く学長より色々の話を聞きて
裏近くになる寺を見に行く。寺内
に地獄の人形ありし

六

NII-Electronic Library Service

Ohkagakuen University

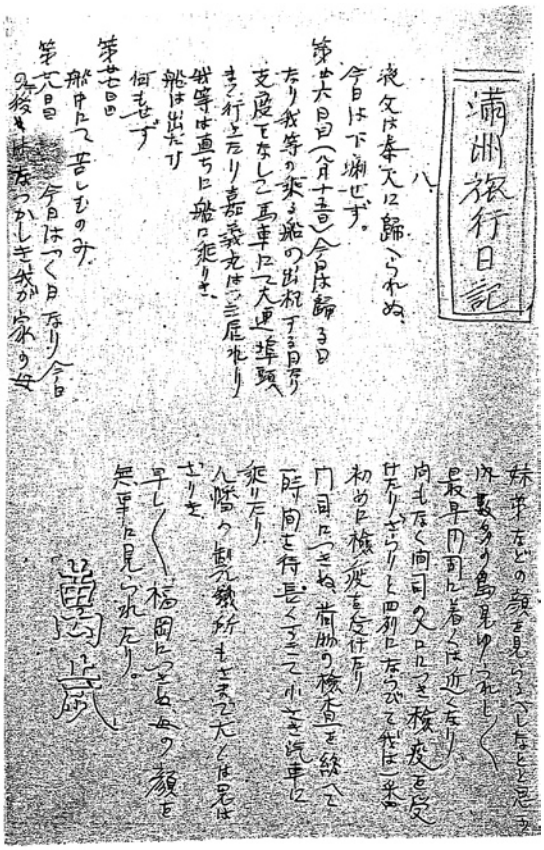
第二三日。旅順。日露戦争の戦跡めぐりで、二〇三高地も当然含まれているが、特に感慨を述べるということもない。



第二四日。Kは腹をこわした。翌日、病院で見てもらい、帰国に支障ないといわれた。父は、この夜、奉天に帰った。

第二六日(八月一五日)。大連埠頭で嘉義丸に乗る。二七日目は船中で苦しむ。

第二八日。門司に着く。福岡に向かい「小さき汽車」に乗った。「八幡の製鉄所もさまで大とは思はざりき」。「聞きしに勝る製鉄所の大規模には我も驚かざるを得ざりしなり」という往路第一日目の印象と大きく変わった。

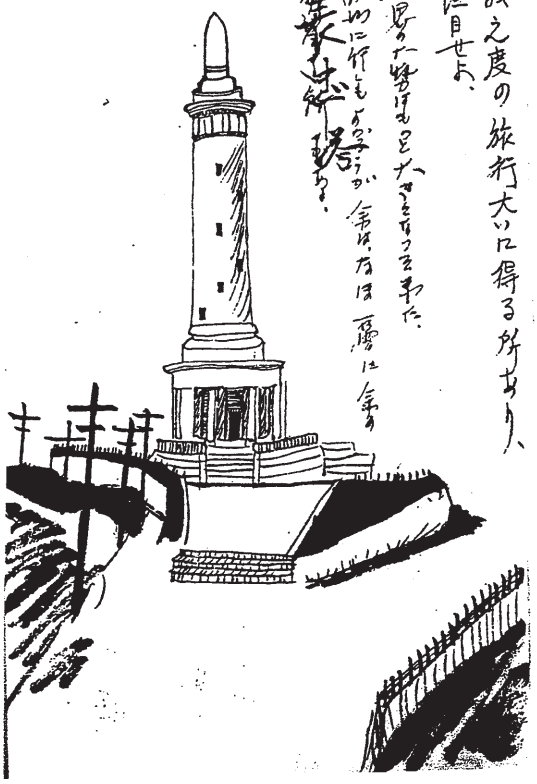


以上、ごく概略をたどったこの満州旅行を通して、Kは、満州について、自己の将来について、どのようなことを自覚しえたであろうか。それを端的に表明したと見られるのが、「満州へ行け」という、宣言にも似

NII-Electronic Library Service

Ohkagakuen University

た文章である。この前半については前稿に示したが、改めて全体を載せる。末尾の三行は他の兄弟の書き入れた評言と見られ、これについては後に触れる。



〔表忠塔（旅順）〕

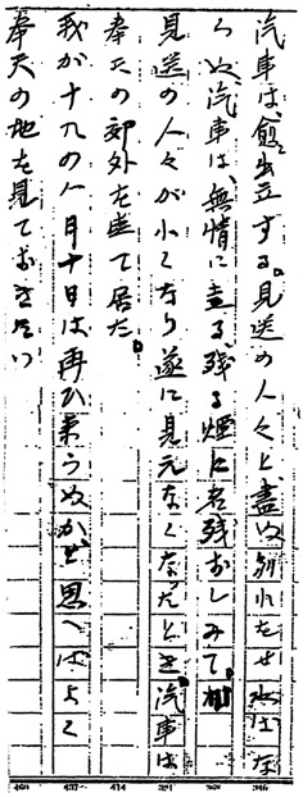
「狭き日本限りある我が帝国」の活路を「広い〳〵平野」のある満州に求める考えに、Kも強く共鳴している。

「日本の国にて名を上げ得ざるより」という言葉があるが、どのような境遇にある人間をいうのか。Kには具体的なイメージが描かれていたのだろうか。無条件に満州のすばらしさ、可能性に引かれている人間とはいえないようである。

「我満州にて死なん」という言葉が、前の行にいう農業家にかかるのか、後日起こるという「戦」にかかるのか。すでに知られているKの生涯をもとに解することもできようが、それは控えておこう。ただ、父の仕事に共鳴して、父とともにその仕事に従事したい、という意欲は、ここには認めにくいといえよう。

四

長兄Sの「満州紀行の一節」は、旅行の行程でいえば、奉天を離れるところから書き出されている。旅行そのものよりも、旅行によって触発された自からの感慨を綴ったものといえよう。



彼の文章で力点が置かれるのは金州で、それも現在の金州そのものよりも、往事の、父堅一の活動していた金州の、父も中心人物の一人とな

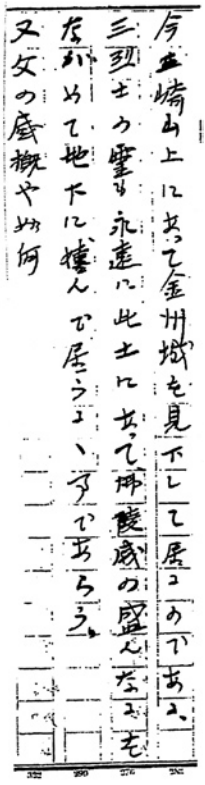
NII-Electronic Library Service

Ohkagakuen University

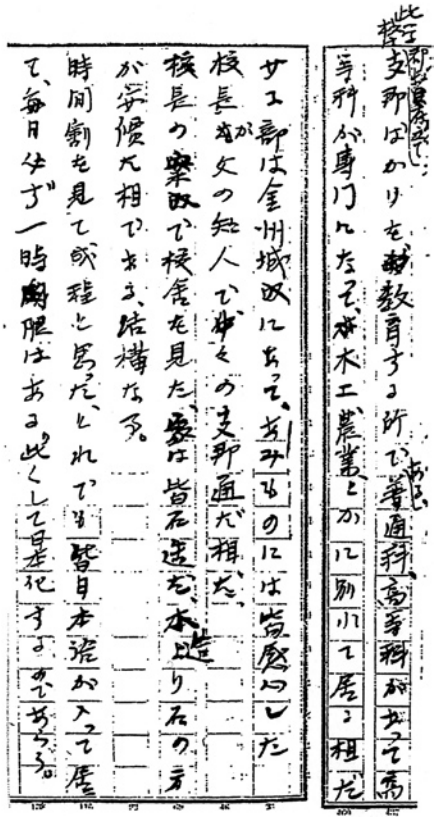
る物語について述べることである。

父と同じく軍事探偵として行動した三人は捕えられ処刑された。生きのびて任務を全うした父は、後にその跡をたずね三人の遺体を弔い、三烈士の碑を立てる。今度の旅行でも父から聞いたかもしれない、後にも思い起こされることになる話であった。

いわば、父と満州とのつながりの深さ、先に見たKの文章にあったような、「日本の国にて名を上げ得ざる」ような事情とは違う意味を満州は持っていたこと、を確かめるような文章になっている。



金州で実際に見たものに関しては、Kが軽く触れていた南金学堂についての言及がある。「父の知人」が校長をつとめる郡督府立の中国人対象の学校で、毎日一時限は日本語が入っていた。「此くして日本化するのであらう」と、肯定的にSは記している。



旅行では、次に旅順に行き日露戦争の戦蹟めぐりをするわけだが、Sがここで書こうとしたのは、日清戦争の古城場をめぐり聞いた話で、全滅した日本の一小隊の悲劇のことであった。この部分は、その後削られたまま、「満州旅行の一節」は中断された形で綴じられている。

とはいえ、右のような形の文章には、Sの、現在の満州、これからの

九

NII-Electronic Library Service

Ohkagakuen University

満州との関わり方についての思いの表われを見ることができるのではないだろうか。

Yの書いた二つの文章のうち、「旅の後で思った」は小咄風で、残された休みは宿題に追われる、というもの。もう一つ、「或日の夕方」は、旅行中のエピソードといえるまとめ方をしている。「いとせわしげに見ゆるは我が同胞のこと、支那人は大陸そだちの大ものとて悠々と」と書いている。

満州旅行に関係あることについて書いているといっても、いわば旅行の本体に触れたものにはなっていない。自分の将来に関わるものとして満州を、満州における父の仕事を考えるような文章は、ここでは見ることができない。

見ることができないといえば、Mは満州旅行について何の文章も出していない。今回の『骨肉』の表紙絵を書いたのは彼で、それについて短い文章を書いているが、満州については何もいわない。朝鮮の家を描いたスケッチがあるが、満州ではない。表紙絵も含めて、満州について触れることを、むしろ避けているといえそうだ。

一〇

NII-Electronic Library Service

Ohkagakuen University

「満州へ行け」というKの文章に付された評言、というより感想は、「世界の大勢はもっと大きくなった。満州に行くもよかろうが余は、なお一層に余の希望する所がある」というのであった。

今回見た兄弟の文章から推して、MかYが書いたと思えるが、はっきりしたことはわからない。

兄弟たちの「立身出世」への父の期待に、四人はどのように応えようとするのか。この課題に対して、今回の旅行は、それぞれに、どのような自覚を促すことになったか。その内面の歴史を、『骨肉』の諸作品からどこまで読み取ることができるか、興味が持たれる課題である。

〈文献〉

唐澤富太郎『教科書と国際理解』中央公論社、一九六一。
向野晋『我が先亡の記』私家版、作成年不詳（向野堅一記念館蔵）
向野堅一『日清戦争従軍日記』向野晋複製版、一九六七。
向野康江「一九〇〇年代の一家庭における図画教育の成果――『骨肉』の発見とその発見による美術教育史研究上の意義」InSEA アジア地区会議発表論文、二〇〇七。
齊藤太郎「『骨肉』――大正期家庭教育をうかがわせる手づくり雑誌」『桜花大学人文学部研究紀要』第一一号、二〇〇九。
柳沢遊『日本人の植民地経験』青木書店、一九九九。

〔補〕

『骨肉』八・九月号の誌面構成から兄弟の関心の表れを見ても、朝鮮・満州旅行が特に大きな出来事とはいえないようである。第一次大戦で活躍の潜水艦、航空機への関心が高い。大戦時、日本にとっては敵方になったドイツの潜水艦に示された高い関心は、兵器を含め「文明の利器」への関心が、政治・経済・社会の動きへの関心を超えていたことを示すものといえよう。

〔向野家資料の閲覧に関し配慮をいただいた向野堅一記念館・向野康江氏に感謝致します。〕

一一

NII-Electronic Library Service

Ohkagakuen University

NII-Electronic Library Service